

論文審査の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	太田 智美
論文審査担当者：	主査	南澤 孝太（慶應義塾大学・教授・博士（情報理工学））	
	副査	稲蔭 正彦（慶應義塾大学・教授・博士（政策・メディア））	
	副査	岸 博幸（慶應義塾大学・教授・MBA）	
	副査	佐藤 知正（東京大学・名誉教授・工学博士）	
(論文審査の要旨)			
太田智美君の博士号請求論文「ロボットパートナーの生活圏拡大に向けた Robot Friendly な社会の創造」は、人々がロボットと共に暮らす近未来の社会を見据え、現在既にロボットと共に暮らし始めている人々をロボットパートナーと呼称し、太田君本人を中心とするロボットパートナーのコミュニティを対象として、コミュニティのメンバーがロボットを連れて公共空間に出かけやすい社会環境、すなわち Robot Friendly な社会を創出することを目指して行われたアクション・リサーチに関して論じたものである。 本アクション・リサーチでは、まず街中のレストランやホテル、公共施設や交通機関等を対象としたフィールドワークを通じて、ロボットの受け入れに関する現状を調査し、現行の法的規範や各組織の規則における扱いについて明らかにした後、各施設が受け入れ可能なロボットの条件や可能な対応について可視化する活動として、1 つ目のアクションである Robot Friendly プロジェクトを実施した。シールや Web サイトを用いた情報可視化により、ロボットを連れて出かけられる施設の把握を容易にし、施設側が行うべきロボットへの対応のガイドラインを明らかにした。次に 2 つ目のアクションとしてロボットパートナー自身やその周辺の人々が Robot Friendly な施設を増やせるよう、アンバサダー制度を立ち上げることでコミュニティを拡大し、ロボットパートナーコミュニティが自律的に Robot Friendly な生活圏を広げられる仕組みを創出した。最後に 3 つ目のアクションとして、銚子市において、単体の施設ではなく、複数の施設や公的施設、交通機関も含めた、地域規模での Robot Friendly な環境の創出を試み、一連の活動を通じて、ロボットパートナーという新たな存在の生活圏を拡大し、新しい環境を創るための 1 つの方法を示した。 本論文の審査では、ロボットパートナーにとってのロボットとは一般的なロボットの概念とどう異なるのか、ロボットを受け入れる施設や地域の人々の側にはどのような心理的変容や行動変容が生じたのか、ロボットパートナーたちのマインドセットはどのように変容したのか、車椅子利用者や盲導犬利用者など、これまでの社会においてマイノリティとされた人々が生活圏を確立してきた歴史とその手段に対して、Robot Friendly プロジェクトが有する独自性はいかなるものか、本論文で実施されたアクションがどの程度の理論的一般性を有し、Robot Friendly の概念が今後継続的かつ自律的に維持・拡大されるためにはどのような取り組みが必要となるのか、等について活発な議論が行われた。 以上の議論を通じて、本論文が提示するロボットパートナーという新しい暮らし方の概念の新規性と、その生活圏を拡大するという Robot Friendly プロジェクトの取り組みの独自性、アクション・リサーチが実社会にもたらしたインパクト、およびの一連の研究活動を通じて世の中に提示された未来社会に対する新たな視点は、博士（メディアデザイン学）を授与するにふさわしいと判断され、論文審査委員の全会一致により、これを認定するものである。			
(審査経過)			
1. 2022 年 6 月 16 日 18:00～20:00 予備口頭試問審査がオンラインにて開催され審査の結果合格した。 予備口頭試問審査委員：砂原秀樹、南澤孝太、稲蔭正彦			
2. 2022 年 12 月 28 日 15:30～17:30 博士論文公聴会がオンラインにて開催された。同公聴会終了後、博士論文審査会が開催され、公聴会について全会一致で合格を決した上で、論文に関して修正すべき内容を提示した。 公聴会出席者：博士論文審査委員 4 名、審査委員以外の KMD 研究科教員 4 名、学生・一般聴講者 30 名			
3. 2023 年 1 月 26 日 修正が完了した博士論文の提出を受け、審査委員および研究科委員の全会一致をもって論文を受理した。			